

第31回 日文研フォーラム



ポーランドにおける谷崎潤一郎文学

Literature of Tanizaki Jun'ichiro in Poland



ミコワイ・メラノヴィッチ
Mikołaj Melanowicz

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原 猛

● テーマ ●

ポーランドにおける谷崎潤一郎文学

Literature of Tanizaki Jun'ichiro in Poland

● 発表者 ●

ミコワイ・メラノヴィッチ

Mikołaj Melanowicz



発表者紹介

ミコワイ・メラノヴィッチ
Mikołaj Melanowicz
ワルシャワ大学東洋学研究所教授

1935年 ポーランド生まれ
1959年 ワルシャワ大学卒業
1968年 ワルシャワ大学博士号取得
1959年 ワルシャワ大学東洋学研究所助手
1971年 ワルシャワ大学東洋学研究所助教授
1989年 ワルシャワ大学東洋学研究所教授
1990年-1年 国際日本文化研究センター客員教授
現在に至る

専門 日本文学

主な出版物

(著書)

- 1976 谷崎潤一郎と日本の土着的伝統の世界 ワルシャワ大学出版局
1983 日本文学史概説(ポーランド語) ワルシャワ大学東洋学研究所
1984 A Man and Society in Japan Today (ed. and co-author) ワル
シャワ大学出版局
1990 Reflection on Literature in Eastern and Western Cultures
(ed. and co-author)

(論文)

- 1984 Some Problems of the Theory of the Novel in Japanese Literature, IN: Europe Interprets Japan, Paul Norbury pp.145-154
1984 Man and Society as Reflected in the Works of Kaiko Takeshi
In: Man and Society in Japan Today, Warsaw University Press
1986 Moral Cry -Oe Kenzaburo's World of Ideas
1990 Ethos in Novels by Jun'ichiro Tanizaki and Henryk Sienkiewicz.

(訳書)

- 芥川竜之助「河童」(1963), 安部公房「砂の女」(1968), 井伏鱒二「黒い雨」(1971),
谷崎潤一郎「蘆刈」「春琴抄」(1971), 同「蓼喰ふ蟲」「瘋癲老人日記」(1972),
夏目漱石「こころ」(1973), 同「吾輩は猫である」(1977),
大江健三郎「万延元年のフットボール」(1979), 木下順二「夕鶴」(1987),
川端康成「千羽鶴」「眠れる美女」(1987), 遠藤周作「侍」(1987),
小松左京「日本沈没」(1989),
日本短編小説集 『昇る太陽の影』(1972)『聖産業週間』1945-1975 (1986)

はじめに

この頃、文学について話をするには、何か愚かな遊びのように思われているのではないだろうか。文学はあまり意味のないようなものになってしまったのではないかという懸念も聞かれます。文学が私たちの視野からだんだん遠ざかっていったのではないだろうか。確かに文学よりずっと重大な問題が世界にはたくさんありますが、それにしても、日本の社会の中で、文学の役割が小さくなってしまったように思われます。文学がその使命を果たせなくなったのでしょうか。それとも、その使命が変わりつつあるのでしょうか。それが私の確信であるか否かは別として、最近の評論を見ていると、そういう悲劇的な出来事を告げる本がずいぶん出ております。

その一例として、プリンストン大学の元教授であるアールビン・ケルナンが、去年の終わり頃、“The Death of Literature”という本の中で、文学がその役割を果たせなくなってしまうと書いています。その理由をいろいろ具体例をあげて説明しておりますけれども、その要点は次の一文に尽きます。

The brightest and the most imaginative thinkers don't any longer find poetry, fiction or drama, the best way to work out their ideas or to influence the

すなわち、「創造の最も豊かな人たちは、自分の思想を表現するのに、または重大な問題について影響を与えるのに、もはや文学がいちばん良い方法であると思わなくなった。」文学は歴史的な現象であって、文化的概念として十八世紀の終わり頃に現れたもので、その前にはなかったと言っています。その前にあったのは、詩歌で、ギリシヤの場合は喜劇と悲劇です。日本の場合は歌でした。文学という概念は、十九世紀の終わり頃になってやっと、広がってきたものに過ぎないというわけです。

十八世紀から二十世紀にかけてのそうした文学の役割が現在終わりつつあるのではないかということをも、ケルナン教授は指摘しているのです。

日本の評論では、奥野健男が『自選評論集』の「文学は死滅するか」という論文で、次のように言っております。

現代日本文学の貧困については、多くの人々から繰り返し言われてきた。それは、明治以来の日本文学が、世界に誇りうるような傑作をまだ一作も生み出していないという引け目と焦りとが、言わせる言葉にほかならない。だが、ぼくには、当分日本からトルストイやロマン・ローランや、トーマス・マンのよう

な作家たちが生みだした、偉大な作品が、生まれる可能性はないと思われる。……現在日本に横行している文学は、ぼくたちをほとんど感動させない。

それでは、「文学は死滅するか」、または、文学には希望がもうないのでしょうか。みなさんも、どうか考えて下さい。

その結論が出るまで、谷崎のことを少し話し合ってみましょう。

谷崎潤一郎の読んだ小説

谷崎はどういう文学が好きだったのか、どういう小説を読んでいたか、それを知るために、彼の「直木君の歴史小説について」という昭和八年の時評というか評論を見てみましょう。

近頃の少年たちは、どうであるか知らぬが、私などが十三、十四歳の時分初めて小説本といふ、面白い読み物のあることを知り、それに親しみを覚えるやうになつたのは、主として歴史を題材とした物語、いはゆる歴史小説が世に行はれてゐたお陰であつた。

と述べ、その続きを読みますと、谷崎潤一郎が少年時代に何を読んでいたのかがよくわかります。何人かの小説家の名前が出ておりますけれども、専門家以

外でその名前をご存じの方がおられるかどうか、私は疑問に思います。例えば、村井弦齋といった名前が出てきます。幸田露伴は名前が知られておりますが、彼の有名な『五重塔』といったものではなくて、『縁外縁』（後に『対鬪體』と改題）などを読んだりしています。さらに、石橋忍月など、今誰が読んでいるでしょう。こうしたことから、私たちは当時読まれていたものと、日本文学史、世界文学史に残っているものとは大分違うということも心得なければならぬと思います。

また谷崎は、少年時代からいわゆる英雄を崇拜し、武将の話などを好んで読んでいたことがわかりますけれども、そうしたことから、当時のいわゆる大衆小説作家、直木三十五、大仏次郎、中里介山らの出現を非常に喜ばしい現象と見ており、日本の小説にも良いものが出て来た、と言って大変喜んでゐるわけです。そして、「大仏君や直木君のやうな器用な作家が出てきたといふのは、さういふふうには全体の文学的教養が進み、技巧の水準が高くなつてきた結果であつて、この分でいけば、やがては『クオ・ヴァ・デイス』のやうなスケールの大きな作品が現れることも、遠くはあるまい。」と書いております。

シエンキエヴィッチ小説と谷崎

『クオーヴァデイス』という小説は、谷崎の若い頃と違って、今では読む人も少なくなつたような気がします。『クオーヴァデイス』は、シエンキエヴィッチというポーランドの代表的な小説家が一八九六年に書いたものですが、谷崎がどうして『クオーヴァデイス』を知っていたのか、それについては「早稲田大学における坪内逍遙のシエンキエヴィッチ講義ノート」という面白い資料があります。その内容の大部分は、去年の終わり頃に出た『ポロニカ』というポーランド文化を紹介する雑誌に発表されております。

それは坪内逍遙が早稲田で講義するために記したノートで、二〇〇頁ほどの非常に読みづらい手書きのノートですが、非常に詳しくローマ文化を調べて『クオーヴァデイス』という小説について講義しています。その講義を聞いた人、松本雲舟という人が一九〇八年に『クオーヴァデイス』を日本語に翻訳しました。もちろん英語からの翻訳です。その後、その小説を谷崎が読んだようです。

ここで、シエンキエヴィッチのことを詳しく紹介する時間はありませんが、もし興味をお持ちの方は数年前に私が学会で発表した論文が近いうちに印刷される予定ですので、それを読んでいただければ幸いです。一つだけ申しておきます

と、シエンキエヴィッチの作品でポーランドでいちばん読まれ、またポーランド人の教養を養うためにいちばん大きな役割を果たしたのは、『クォーヴァデイス』よりも、『火と剣もて』（一八八六）、『洪水』（一八八六）『パン・ヴォウォディヨフスキ』（一八八六—一八八八）の三部作です。

シエンキエヴィッチの作品の中に出てくるポーランドの歴史とフィクションの中で、いちばん大事なのは、騎士道のエトスです。十九世紀終わり頃というのは、ポーランドという国家はないわけですから、ポーランド文化やポーランド語は生きており、ポーランド文学も行われておりました。そういう滅亡した国ポーランドの絶望感を救い、民族意識を持続させるためには、シエンキエヴィッチはポーランドの英雄談のようなものを書き、最近まで非常に興味を持って読まれていました。そうしたシエンキエヴィッチの騎士道のエトスの、ポーランド文学における役割、学校以外の教養における役割について、私は谷崎と比較しながら、書いてみたのです。

以上の意味で、谷崎にとって、『クォーヴァデイス』という小説は、非常に重大な小説でありましたし、谷崎も、『クォーヴァデイス』のような小説を書こうとしたわけです。

谷崎との出会い

私の谷崎文学との初めての出会いは、私がまだ早稲田で萩原朔太郎を研究していた六十年代の半ば頃にさかのぼります。ポーランドに帰る前、「萩原朔太郎についての論文を完成した後、これから何を研究したらいいのだろう。何が日本文学で面白いだろうか」と何人かに質問したのですが、その時、同僚の佐藤さんにとっさに、「谷崎です」と言われました。それで、私は資料を集めてポーランドに帰り、その後いろいろな資料を取り寄せては、順番に谷崎のものを読み始めたのです。

私は谷崎潤一郎氏自身にお会いしたことはないのですが、この間亡くなられた松子夫人には、どこかの喫茶店で話をした記憶がぼんやりとあります。またその後で、綺麗な草書で書かれた手紙を戴いたことがあります。しかし、私の谷崎研究は、谷崎氏自身に会っていないとか松子夫人にお会いしたことは関係なく、進められました。その頃は、英訳があまりなかった時代で、『春琴抄』のあまりよくない翻訳が出ていたくらいでした。現在では、アメリカのハワード・ヒーベック教授やアントニー・チェンバース教授、また最近『猫と庄三と三人の女』と『幼少時代』の素晴らしい翻訳を出したポール・マッカーシーといった人たちが、

谷崎文学をアメリカなどにつぎつぎ紹介されていますが、私が読み出した頃には、そういう翻訳がほとんどありませんでした。

今思い出してみますと、私は『刺青』から読みはじめたように思いますが、この作品はまだ人々が今のように激しく軋み会っていなかった時代、「愚か」という尊い徳を持っていた昔のことを書いたものです。この「愚か」という意味について、ずいぶん後になって、評論家の磯田光一さんが、『愚かの美德』という本で、谷崎の生き方、文学と結びつけて非常に面白い論を展開しておられました。そして私にとっても、この「愚か」という言葉が、谷崎文学を味わうためのキーワードになっていいると思います。

その後、『痴人の愛』、『富美子の足』、『卍』、『吉野葛』、『盲目物語』、『蘆刈』を読んでいた頃、ある偶然な出来事に会いました。その頃、私はまだ谷崎を何も翻訳していませんでしたし、これから論文を書くころと思っていた時でしたが、突然ある出版社から電話がかかってきて、「フランス語訳から谷崎潤一郎の短編小説二編を翻訳して貰ったのですが、全然面白くない。谷崎は本当に優れた作家なのでしょうか。」と言うのです。私はびっくりして、では私がその『蘆刈』の一部分を翻訳してみましようということになったのです。

一週間で二十頁ぐらい翻訳しましたが、フランス語訳では、非常に大事な『蘆刈』の序文の文化論が削られているのです。フランスの翻訳者や出版社は、その部分が非常に難しく分かりにくいので、読者は読んでくれないと思つて削つたのです。残つたのは、童話文学より面白くない部分だったのです。

その序文の部分は、翻訳して、非常に私を興奮させたところでして、日本の古記録や和歌の引用がたくさん編み込まれており、非常に密度の高い優れた文章なのです。水無瀬に月見に出掛けた辺の文章は、語り手の感じも出ていまして、そういうところがないと谷崎の作品は面白くないのです。そうした序文は、後の話に明かりを与え、一見何気ないストーリーに非常に重大な意味を与えているわけです。ですから、そのフランス語訳からの翻訳は、結局出版されませんでした。そこで改めて、私に翻訳を依頼してきたわけです。これが私の谷崎の翻訳の始まりでした。もしこういう偶然が働かなかつたら、私の谷崎文学の最初のポーランドの紹介は、非常に拙いものになったと思います。

私の翻訳が優れているかどうかわかりませんが、その削られたところを非常に詳しく訳しました。それは、谷崎の文章でもないし、日本文学の文章でもないでしょうが、私はできるだけ忠実に、またできるだけ文章に味わいを与えるように

訳しました。私としてはいろいろ心配だったのですが、『蘆刈』と『春琴抄』の二冊が出た時、ラジオやテレビなどいろいろなところに引っ張り出されて、座談会に参加したのですがその時感じたのですが、ポーランドの評論家や読者は、そういう難しいところを、よく深く読んでくれていたのですね。それから谷崎を出す出版社が、他の翻訳も頼んでくるようになったわけです。それで『蓼喰ふ虫』や『瘋癲老人日記』も訳され、谷崎はポーランドの読者にとって日本の代表的な作家になったわけです。

もちろん安部公房も『砂の女』のおかげで有名ですけれども、谷崎は映画界の黒沢明と同じように、日本文化の代表者として見なされています。こうした事情は今でもそうなっていると云えます。(と言いますけど、本屋には本がなくて、映画館には日本の映画がかからないからです。)だから、谷崎以外の日本の文学を紹介しようと思うと、非常に選択が難しいのです。また、いつか日本の娯楽映画、例えば『男はつらいよ』とかを、タダで日本から貰って見せたのですが、評論家は皆、そういうものを見せないほうがいいのではないかと言うのですね。悪い映画ではないのですが、皆は黒沢、小津安二郎、大島渚といった作品じゃないと、日本のものとして認めない状況になっているわけですね。ただ、こうした見

方は、去年かおとしまでの話です。

現在のポーランド出版事情

現在のポーランドは多少事情が変わってきています。本屋に置いてある書物には二通りあります。まず大衆小説。『宮本武蔵』なんかがあってもいいんですが、日本のものはほとんどありません。大衆小説といいますが、まずアメリカの小説です。その一つは、いわゆる『ぐうぐ群島』のようなものや、ソ連の強制収容所から生き返った人たち、主にポーランド人やロシア人の記録ですが、文学的な記録もあります。この二種類の本が本屋にたくさん置いてありますし、また売れています。

本が高くなっている危機の時代ですが、私は谷崎文学などの日本文学を紹介しようとして、ある出版社と共謀して、今準備中です。勇気を出して出版すれば、うまくできるのではないかと思っています。谷崎から始めて、やがてその他の文学や新しい文学に広げ、いわゆる日本文庫のような形になればいいと考えています。

谷崎の評価

谷崎文学については、ある意味で谷崎に似ているイワシユキエーヴィッチというポーランドで最も有名な小説家が「ワルシャワ生活紙」という新聞の文学評論欄で『蓼喰ふ虫』と『瘋癲老人日記』を絶賛してくれました。イワシユキエーヴィッチは、『瘋癲老人日記』を老人文学の世界的な傑作だと言ってくれましたし、また、日本の小説は、日本の水墨画にたとえて、暗示に飛んだ点描で現実を表現する特性が内在していると書いております。

谷崎文学やシエンキエーヴィッチ文学が、これからどういう役割を果たすかということとは、簡単には答えられないと思えますけれども、とにかくシエンキエーヴィッチは、最近までポーランドでいちばんよく読まれた小説家であり、そしてまたポーランドでは、文学というものが、最近までさまざまな生活様式や価値、またそれらの序列づけを紛糾させる重要な役割を果たしてきたわけです。文学が、ポーランドの道徳教育のどれだけの部分を受け持っているかを言うのは難しいことですから、文学が人の心を修める点で、今もなお家庭や学校の教育と張り合っているとすることは、確かに言えると思えます。文学の啓蒙的な教育的役割は、日本においても、ある時期には非常に重大であったと思います。そうした意

味で、現在において『源氏物語』や『万葉集』が、また夏目漱石や谷崎潤一郎の著作がどの程度、日本という国の教育に意義を持っているのか、それを明らかにする試みも必要であると思います。

どうも私の予感によれば、『万葉集』や『源氏物語』とともに、谷崎が読まれる限り、文学は死滅しない、文学は死なないと思われまゝ。谷崎は娯楽の作家、思想のない作家と言われたりしますが、思想のない作家ではない、と私は確信しております。それには政治思想はないかもしれませぬけれども、思想にはいろいろな形のものがあります。谷崎文学には生きることの重大性、生きる喜びの思想が、ずいぶん入っていると思います。そしてその他の思想も、暗示的に込められています。

この間とても興味深い本を、偶然に読みました。それは日文研の鈴木貞美さんの『人間の零度』、もしくは「表現の脱近代の寓意の爆弾」という論文で、鈴木さんは谷崎の、特に『細雪』について、非常に重大な、面白い指摘をしておられます。それは『細雪』の最後のところで、日本の美を代表すると思われる雪子のイメージを、谷崎がどうして最後に汚してしまったのか、また妙子さんを結局死なしてしまったのはどうしてかという、問題に対して、そのイメージの寓意性、

アレゴリカルな意味を指摘しているところであります。それは非常に興味深い指摘だと思えます。

谷崎は、日本文学における、また世界文学における重要な文学者であると同時に、私にとって非常に大事な小説家であります。彼自身は必ずしも常識的な道徳家ではなかったようですけれども、その生き方、またその作品に描かれた人間たちの総合的な人間観は、誠に大事なものだと思います。谷崎が私に教えてくれたことは、生きることがどんなに素晴らしいことかということであり、澆刺とした生命感に溢れてた主人公たちを、美と醜、死と生とともにこれほど素晴らしく書けた人は、世界にあまりないのではないかと思えます。

日本の二十世紀文学は、ドストエフスキーやトーマス・マンといった小説家を生んでいないとよく言われます。それはそうでしょう。ドストエフスキーは一人だけです。トーマス・マンもそうです。日本がドストエフスキーを生むはずはないのです。しかし、日本は谷崎潤一郎を生んだわけです。『万葉集』と『源氏物語』のおかげで谷崎が生まれたのです。谷崎が生んだ文学は、死滅することはないと思えます。

(資料)

谷崎潤一郎に関するポーランドの本

Tanizaki Jun'ichiro:

Dwie opowieści o miłości okrutnej [Ashikari, Shunkinshō], Państwowy Instytut Wydawniczy/ = PIW/ ,Warszawa 1971

Dziennik szalonego starca [Fūten rōjin nikki],
Niektórzy wola pokrzywy [Tade kuu mushi],
PIW, 1972

“Ulotny most snów” [Yume-no ukihashi]. See in
: Tydzień świętego mozołu. Opowiadania japońskie
1945 - 75. [Seisangyō-shūkan. Nihon-tanpen-shōsetsu,
1945 - 1975. PIW, 1986.]

Mikołaj Melanowicz, Tanizaki Jun'ichirō a krag
japońskiej tradycji rodzimej [Tanizaki Jun'ichirō
- to nihonteki dentō] , Wydawnictwa Uniwersytetu
Warszawskiego, Warszawa 1976

(評論)

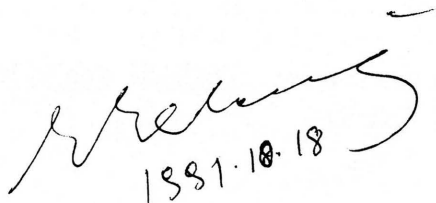
Mikołaj Melanowicz, Tanizaki Jun'ichirō. Czytelnik
shuppan (近刊)

発表を終えて

参加者の方々との長い質疑応答のほかに、当日、もうひとつの出来事が私にとって一生の思い出になりました。フォーラムでの発表の記念にと、知らない方から絵をいただいたことです。石田法清さんという絵師の方が「竹」という水墨画をくださって、私は大変感動しました。

桜の咲くころに、大好きな竹のイメージをおこしてくれて、日本の文学作品をいろいろと思い出したわけです。1960年代に萩原朔太郎の詩を読んだり、論文を書いたりしていたことや、芥川龍之介の作品を翻訳していたこと、そして大好きな黒沢明の「羅生門」などの映画をポーランドで見たことなどがよみがえってきました。

当日のちっぽけな出来事のおかげで、昔の思い出がもどってきたのです。そんな感動的な機会をつくってくださった日文研の方々に心から感謝する次第であります。



1981.10.18

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORI BEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがひ」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋—都市社会の自由とその限界—」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性—猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに—」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
14	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
15	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
17	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ(フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
19	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ(インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー(筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン(カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ(スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ(ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟(北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
25	2. 9.11 (1990)	馬 興国(遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
26	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト(リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールス王伝説における主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
31	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンベルの上洛記録」
33	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jurgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

35	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
36	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」

○は報告書既刊

発行日 1992年3月30日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

©1991 国際日本文化研究センター

■ 日時

1991年4月9日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

